



お江戸舟遊び瓦版 250号

水彩都市江東 こころ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田13-10

細井和喜蔵『女工哀史』岩波文庫

自序

厳しい生育環境の中、尋常小学校5年限りで小学校を終え、13歳の春、機屋の小僧になって自活生活に入り、大正12年まで約15年間、紡績工場の下級な職工をしていた自分を中心に、虐げられながら「愛の衣」を織りなす日本300万人の女工の生活記録である。この記録を書こうと思ったのは余程後年になってからである。

大正9年の12月に上京し亀戸の工場に入り、はじめは猫をかぶっていた。大正12年7月起稿して飢餓に怯えつつ妻の生活に寄生して前半を書いたが、大震災で工場を締め出され、兵庫の小さな工場に入り、1日に12時間労働した傍ら後半を書き上京した。

私が紡績工場へ入る前の女工虐待的事実は、紡績通の2老人からの聞き込みによるもので、女工寄宿舎のことは妻の談話を用いた。諸統計資料は大阪の友人に便宜を与えてもらった。

第一 その梗概

- 人間が生きていく上で「衣食住」が必要なことは言うを俟たぬ。衣食住は大自然の運動と人間自身の労働によって得られる。労働なくして一日も生きては行けない。
- 農民は人類の父である。「紡績工」はその父が作った原料を糸にひき、布に織って子供に着せる「母性的いとなみ」であり、愛の労働である。
- 日本は古から「絹」の国であった。美しい絹が乙女の手で糸にひかれ、機に織られて愛の衣に縫われるのであった。しかし、限りない人口増と外国との交際は必然的に「綿」を要求した。
- 日本の紡績業の歴史は、安政の幕末時代に薩摩の島津斉彬が英國から紡績機を輸入したことに始まり、藩の子女を女工とし、百姓や町人はなれなかった。その後急速に世界的地位へ発展した。
- 明治維新後、欧米の綿製品の需要が激増、輸入の6,7割に。明治13年大阪紡績が創設、大工場が建設された。大正10年には日本の紡績業は世界6位、紡織工200万人、うち女工が8割。

第二 工場組織と従業員の階級

- 工場の種類は、純紡績、織布、紡績・織布兼営、綿糸、絹糸、毛糸、麻糸紡織と多様！
- 紡織工業は、近世資本主義的大工業の極致であり、組織は複雑である。従業者員並びに職工の階級が実に甚だしく、あたかも軍隊のようである。社員の配置は工場と営業所にまたがっており、社長などの幹部重役以下、一等社員から八等社員までになる。

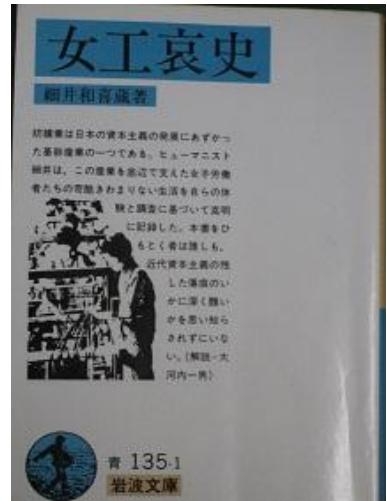
第三 女工募集の裏表

- 女工募集第一期（明治10年～27, 8年）：募集は簡単であった。
- 第2期（日清戦争から日露戦争 明治27, 8年～37, 8年）：暫時女工募集は困難に。強制的送金制度と年期制度、身代金制度、教育制度が生まれ、自由競争時代となる。
- 第3期（明治38年以降）：募集地保全時代。女工募集は直接募集と嘱託募集に2分。

同業工場間の女工争奪戦争は労使の抗争より烈しく、宣伝文は資本主義擁護にもなった。

第四 雇用契約制度

- 入社の際に、年期を切り、一方的に証文を入れるなど、労使どちらから見ても随分無法であった。



第五 労働条件

- 紡績工場は長時間労働を強い、工場法発布以前は12~14時間、以後11~12時間に。
休憩と食事時間は、9時、12時、15時で各15分、20分で、合計1時間。
賃金は、男工日給、女工請負、月払い。賞与があつてはじめて最低の生活費に届く程度。
紡績では給品制度（社内販売）が豆腐や饅頭までもの多様に行われていた。

第六～第八 工場における女工の虐使、彼女を縛る二重の桎梏、労働者の住居および食物

- 女工虐使第1期：工場法発布前、些細なことにも酷罰に処され、懲罰制度で罰金を。
第2期には能率増進のために女工同士、部同士、工場同士で火花を散らす競争を強制。
- 夏季精勤奨励法：夏の工場労働は厳しく、奨励法で労働を強いた。
- 工場労働の上に、寄宿舎でも様々な規約の許に痛ましい束縛：外出の制限、食物、読み物等の干渉、書信の干渉および没収などを受けた。
- 女工寄宿舎は、濠や堀で囲まれ、一人一畳、合宿式で、煎餅布団、豚小屋であった。

第九～第十二 工場設備、福利厚生施設、通勤工の寄宿舎等

- 防火設備はあるが、避難設備は整っていないかった。保育場と幼稚園はあるところないところがあった。避難設備もつかぬ高層な工場。下宿の食事は実に悪い。風呂もない。

第十三～第十八 工場管理、監督、風儀、紡績工の教育問題、娯楽の問題、女工の心理

- 東京モスリンへは時々文部省の人間が工場教育を視察に来て、講演をして帰るが、若干の袖の下に与ることから実に鼻持ちならぬことを言う。「皆さんには貧乏な家に生まれながらこんな美しい所に住み、雨が降っても学校へ通えるのは会社のお蔭です・・・」と。
- 寄宿舎の隣に学校をつくり、裁縫、活花、茶の湯、作法、刺繡、ダンス等を教えた。
- 東京モスリンの工場歌

「花の名所 亀戸に 番う梅より なお清き 標を誇る 三千の 心は一つ 隅でない」

- 工場管理方法は、人間を疎んじた技術偏重主義で、真の産業発達を阻害していた。
- 職工慰安に、芝居、活動、浪花節等や、遠足・運動会があったが、心は籠っていないかった。
- 女工の恋愛観等は真面目であるが、商工業主義が婦人を工場に追いやり、家庭を破壊に。
- 大正10年東京モスリンに労働組合ができ、一時4000人を超したが、弾圧され衰退した。

第十九 結び 女工問題こそ社会、労働、人道問題の最も重要課題である。

解説：紡績業は日本の資本主義の発展に貢献した基幹産業の一つである。ヒューマニスト細井和喜蔵は、この産業を底辺で支えた女子労働者たちの過酷きわまりない生活を自らの体験と調査に基づいて克明に記録した。本書をひとく者は誰しも、近代資本主義の残した傷痕のいかに深く、醜いかを思い知らされずにはいない。（1980年5月 大河内一男）

所感：教科書で習った『女工哀史』は、群馬県富岡などの物語だと思っていた。しかし、明治30年代に江東区亀戸に、東洋モスリン、東京モスリン、日清紡績などの女工3000人の大企業が創立された。その後、亀戸・大島・砂町地区は日本の富国強兵の最先進地域として、重化学工業化が進んだ地区となった。こんなことを最早誰も知らない時代になっている。

その重化学工業の最先進地区は同時に労働運動の先進地域でもあった。大正2年には東京モスリン工場女工3000人の待遇改善の争議も起こっている。その後に襲った関東大震災時の亀戸事件なども忘れられているが、亀戸が大正から昭和の初めに大工業地域となり、大変賑わっていた要因を振り返り、その陰に女工さん達の過酷な労働があったことを再認識したい。

さらにそれ以前には、東京湾の漁業の恵みの時代や、隅田川（荒川）、江戸川（利根川）と東京湾に囲まれた江戸の近郊農業地区・田園地帯の時期があったことを想い出したい。

環境にやさしい、安全安心なまちづくり・お江戸観光エコシティを夢見て。（文責 中瀬）